

学 位 論 文 要 旨

氏 名 庾 凌 峰

題 目 戦前・戦中（1920—1945）の中国（台湾、香港を含む）における賀川豊彦の交流活動とその受容に関する研究

学位論文要旨（和文2,000字又は英文1,000語程度）

本研究は、東アジアにおける賀川の行動と思想の影響を解明するために、賀川研究では今まで使われてこなかった新資料を用いて、民国期の中国における賀川の活動とその受容を中心に、日本占領期の台湾とイギリス占領期の香港における賀川についての報道を整理してきた。賀川は、その活動と思想を通して、中国、台湾、香港の人々から大きな関心を寄せられ、これらの国々や地域の人々に大きな影響を与えた。また、本研究は、賀川が中国、台湾、香港において受容され、実践されたことを究明してきた。

本研究は第Ⅰ部、第Ⅱ部と第Ⅲ部から構成されている。第Ⅰ部と第Ⅱ部では、民国期の中国を主要な舞台として賀川の活動と受容を検討した。第Ⅲ部では、さらにより全面的に東アジアにおける賀川の活動とその受容を検討するために、台湾と香港をも視野に入れて分析した。各章ごとに得られた新しい知見は以下の通りである。

第Ⅰ部は、第1章と第2章から構成されている。

第1章では、広西籍初の中国共産党員であった黄日葵をはじめとする北京大学訪日団五人組が1920年6月4日に神戸新川貧民窟の賀川を訪れたことを、当時発行された新聞や雑誌に基づいて整理し、黄日葵が賀川へ感謝を込めて「贈賀川豊彦先生」と題する詩を著した経緯を考察した。また、本章は、賀川と黄日葵の共通点を確認するとともに、黄日葵が賀川から労働運動と貧民救済の経験を学ぼうとしたことを明らかにした。

第2章では、賀川と誠静怡の関係史を考察し、「神の国運動」と「五カ年運動」の関係、および賀川が「五カ年運動」に与えた影響を明らかにした。その結果、賀川は、福音と社会運動との融合を訴えるリベラルな宗教思想を以て誠静怡に影響を与えたのみならず、組合事業の設立、農民福音学校の試み、農村識字運動の展開などといった社会事業の実践にも取り組み、中国の「五カ年運動」に大きな影響を与えた。

第Ⅱ部は第3章と第4章からなっている。

第3章では、文化思想面から『東方雑誌』における賀川の報道を、労働運動、著述、娼妓運動、農民運動、無産政党運動に分けて考察するとともに、時系列で1920年から満州事変、満州事変から日中戦争の勃発、日中戦争以降という段階で新聞『大公報』における賀川の報道を考察した。

第4章では、民国期の中国で発行された新聞『大陸報』を中心に、『大陸報』の紙面における58件の賀川の報道を整理し、賀川が中国でどのように報道されたか、賀川が中国を訪問した際に中国人にどのように評価されたかを概観した。

第Ⅲ部は、第5章と第6章から構成されている。

第5章では、1922年、1932年、1934年、1938年の賀川による台湾訪問の足取りを追い、大正期、昭和戦前期に賀川が台湾でどのように報じられたかを明らかにした。また、賀川自身の書いた「身辺雑記」、「台湾紀行」とも言うべき「星より星への通路」（1922）などの資料を考察し、安部磯雄らの台湾観と比較しながら、大正期・昭和戦前期における賀川の台湾観を検討した。

第6章では賀川と香港との関係に焦点をあて、賀川が香港とどのように関わってきたか、香港における新聞や雑誌などが賀川をどのように報じたのかを考察した。

すなわち、民国期の中国、日本占領期の台湾、そしてイギリス占領期の香港における賀川の受容にはそれぞれ異なった特徴があった。しかしながら、以下のような共通点があった。

① 賀川から影響を受けたのは、キリスト教徒のみならず、非キリスト教徒もいた。また、賀川の影響力は、キリスト教界にとどまらず、中国共産党初期の共産党員をはじめ、これらの国々や地域の教育家、政治家、思想家といった人々にも及んだ。また、上流階層のみならず、農民、労働者といった下層階級にも及んだ。東アジアにおける賀川思想の影響力は大きかったと言える。

② 福音宣伝と社会事業の融合を訴えた賀川のリベラルな思想は、民国期の中国、日本占領期の台湾、そしてイギリス占領期の香港において大いに影響を及ぼした。

③ 日本経由の西洋文化受容の過程中、賀川の思想は、これらの国や地域の人々にとって、「知的資源」となっていた。

本研究では、独創性と汎用性を考えると、以下の三点の研究意義を挙げることができる。

① 民国期の中国、日本占領期の台湾、イギリス占領期の香港における賀川思想の受容についての考察に取り組むことにより、中国、台湾、香港における日本人の受容史モデルを提供し、社会文化、権力構造と宗教勢力との競合関係についての研究モデルを提供することができた。

② 新資料を用いて、今まで明らかにされてこなかった日本以外の国々や地域（中国、台湾、香港）における賀川評価を究明することができた。こうした賀川研究の空白を埋めることによって賀川の全体像を立体的に、総合的に把握することができたと考える。

③ 教科教育における示唆。賀川と中国との関係を軸に展開された歴史事実の追跡は、日中交流史の中で、新たな可能性を示唆することとなる。また、賀川を含めた日中友好を目指した人物や出来事の教材化が、日本史のみならず、日本史と世界史をつなげる教材開発の基礎資料となるのではないかと考えられる。さらに賀川の活動拠点である神戸から、日本へ、さらに世界へと展開される社会運動の全体像を見る時、兵庫県の郷土教育の教材開発にも資するところがあるだろう。